

学内六報

2016.8.25

no.1485



写真：後藤佑介



大臣とアスリートと総長が「社会を駆動するスポーツ」をテーマにディスカッション スポーツ先端科学研究拠点開設シンポジウム抄録

世界に広げよう、「グレーター東大コミュニティ」の輪

Be a UTokyo ambassador

大臣とアスリートと総長が「社会を駆動するスポーツ」をテーマにディスカッション

スポーツ先端科学 研究拠点開設

The University of Tokyo Sports Science Initiative : UTSSI

拠点長よりご挨拶



石井直方
総合文化研究科
教授

東京大学スポーツ先端科学研究拠点長の石井です。さて、東京大学は、なぜスポーツ科学に真剣に取り組む決意をしたのでしょうか。私からは、生命科学を研究する一研究者として少しお話させていただきます。

私は理学部の出身で、基礎的な研究を長年行った後に、健康やスポーツ科学をテーマとする分野に進みました。そうした経歴のなかで、人間社会においてある種の本質的な問題点があるのではないかと考えるに到りました。科学技術の進歩の速度が、人間自身の進化の速度とは比べものにならないくらい速い、ということです。

この百年あまり、私たち人類は便利で楽に生活できる社会というものを善として、猛烈な速度で進んできました。一方、人間の体というのは、二世代や三世代ですっかり変わるようなものではありません。便利で楽な生活は、人間の体の機能にとって望ましくないもの、本来の機能を減退させるものだという性質を持っている、と言えるのではないのでしょうか。生命科学的見地からすると、便利で楽な生活は、人間にとってマイナスに働くということです。こうした、人間にとって本質的な矛盾が、生活習慣病の増加や社会保障費の増加といった社会的な問題として顕在化し、社会の持続性を脅かしつつあるのが今日の現状です。

この状況を解決する手だてというのは、おそらく一つしかありません。それは、便利で楽な生活のために費やす知恵を、人間本来の機能を守るために使う、ということです。そのために極めて有力なツールとなるのが、スポーツです。スポーツをいかに効果的に活用し、社会を元気にする駆動力として利用するか。これは様々な分野にまたがる分野横断的な課題であり、東京大学がこれからチャレンジしていくべき課題です。そうした課題への決意の表れの一つが、今回の拠点開設だと思っています。今後、全学の様々な分野の研究者の力を結集して横断的な研究を推進する所存です。ご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



馳 浩さん
文部科学大臣

遠藤利明さん
東京オリンピック・
パラリンピック大臣

田口亜希さん
アテネ・北京・ロンドンパラ
リンピック射撃・日本代表

小林●900番教室は30年ぶりです。最後に来たのは、国際関係論のテストで先生の審査が厳しくて単位を落としたときだったと思います。今回はFをとらないようにしないと(笑)。私はスポーツに導かれるように生きてきました。子供の頃は遊びとして野球に親しみ、その後、高校、大学、プロと選手として活動、アメリカではスポーツ専門TV局に勤め、福岡では役員として球団経営に携わりました。スポーツが人生を豊かにすることを実感する一方、裏方として携わる中で、スポーツがもっと社会に役立つ方法があるはずだ、とも感じます。

連携の速さにスポーツの力を実感

五神●いま900番教室の話が出ましたが、私も同様のことを思い出していたところです。地球規模の課題に対して具体的に行動を起こすには、スポーツ科学は最適なものの一つかと思えます。人々がそれぞれ元気に活動できる環境をつくることは、未来社会の基盤として欠かせないものですから。今回、駒場の呼びかけに応じて、連携の輪が1~2ヶ月で全学に広がりました。私は昨年4月から総長として学内を見てきましたが、これはこれまでで最も迅速に話が進んだ取り組みでした。スポーツの持つ求心力の強さを実感しました。

馳●私は世界平和において東大が重要な役割を担うと思います。イノベーションを期待すると同時に、世界平和にとってなぜスポーツが有効な役割を果たすのかも探求していただきたいですね。一方で、さきほどおやつと思ったんですが、田口さんが壇上に上がる際に使

ったリフトはレンタルですね。車椅子用昇降装置が常設でない。障害者も健常者も同様のアクセシビリティの下で活動できる社会をめざすスポーツ基本法の精神で、どの教室でもアクセシビリティの確保を、と言いたいですね。

遠藤●先日、ロンドン市長とバリアフリーの話をしました。バリアフリー化は圧倒的に日本より遅れている、と言われました。ただ、車椅子の人を見かけてずっと手伝ってあげるような心のバリアフリー化は、ロンドンのほうが進んでいるかと思います。社会にとっては共生が当然だと思えるきっかけを東大でつくってほしいですね。思うに、文化もスポーツももとは遊びから始まったはずなのに、なぜか世間では文化のほうが格調が高いイメージがあるように感じます。そんな雰囲気、この研究拠点から変えていってもらえるといいですね。

田口●障害者も自由に動ける世界が理想ですが、日本では土地の狭さもあってそうした設備にできない場合もあるでしょう。最後は心だと思っています。今日も、私が壇上に登ることを考えて、こうしてリフトをレンタルしていただいた。そうやって配慮していただけるのがうれしいです。2020年にむけ、たとえば車椅子用のトイレや駐車場がなぜ広いのかを、私たちパラリンピアンが皆さんに伝えていかなければいけないと思っています。

小林●施設の整備にはやはりお金の問題が重要です。たとえば東大のブランド力を活用してはどうでしょう。アメリカのUCLAはスポーツメーカーと年20億円×15年のアパレル契約をしています。東大もすぐそうしろとは言いま

※上記は抄録です。言葉は適宜省略されている場合があります。※パネリストの肩書きはシンポジウム時点でのものです。

シンポ抄録

東京大学にスポーツ先端科学の研究拠点が誕生し、6月4日に駒場900番教室で記念式典・シンポジウムが開かれました。ここでは、記念式典において「社会を駆動するスポーツ」をテーマに行われたパネルディスカッションを中心にダイジェストでお届けします。スポーツに縁の深い2人の大臣、パラリンピック射撃の日本代表、東大からプロ野球の道に進んだ教授、そして総長は、どんなことを語ったのでしょうか。



五神 真
総長

モデレーター
小林 至さん
江戸川大学教授

せんが、そういう面も含めてどうスポーツを盛り上げるかは考える余地があると思うのです。

スポーツから新しい社会モデルを

五神●民間企業とも協働しながら、結果として、社会が公共財としての大学を支える仕組みをつくるのが大事です。医学的にも工学的にも人文社会科学的にも、私はスポーツをきちんと学理として見つめたい。高いビジョンをもって企業の活動を公共に役立つ方向に転換していくと、多くの面が好転するのではないかと思います。スポーツ先端研究をアスリートに還元し、新しい社会モデルの創造につなげるという提案は、大風呂敷かもしれませんが、希望のもてる挑戦だと思っています。

遠藤●私は国がスポーツを責任をもって支えるべきだと思うんです。スポーツ基本法の最大の特長は、スポーツを支えるのが国の責務だと明記したこと。国民皆が関心をもつには、メダルを増やすという観点もスポーツの効用を広く認知してもらい意識も必要。そうすれば予算もつけられるしビジネス機会も増える。官民連携は科学技術だけでなくスポーツでもあっていい。官民連携のスポーツ研究から新しい技術が出ることを期待しています。

田口●射撃競技では車椅子にテーブルを置き、それを1ミリ単位で調整します。こうした競技力をあげるための研究にはやはり期待します。実は、障害者には、同じように見えてもそれぞれ違った残存機能があります。科学的に見て、この人にはこれが合っていると、私にはこの射撃フォームが合っていると、というこ

究して教えていただけたらうれしいですね。

アスリートのフィードバックに期待

五神●私はものづくりの技術に物理学を使う新しい研究をしてきました。高品質なものを大量生産で安くつくってQOLを上げたのは、高度経済成長時代のイノベーションの成果でしたが、今後は個々の人に即したのをつくらないといけない。大量生産と同じコストで個々に即したのをつくれれば世の中は変わります。それには使う人とのコミュニケーションが必要ですが、その点、アスリートはいいフィードバックをくれるに違いないと思います。最先端の研究者とトップアスリートの組み合わせによって研究は加速する。これは日本の優位性が発展するための起爆剤になる。私個人のバックグラウンドに根ざした思いです。

小林●それでは、スポーツが人生を豊かにするという観点から、最後に一言ずつお願いします。たとえば、文武両道という面から見ていかがでしょう。

遠藤●知・徳・体とよく言いますが、徳のない知はなく、知のない徳もなく、体に知がなければ役に立たない。文武両道は、全体として能力をもっていることが大事です。オリンピック・パラリンピックはもちろんスポーツの祭典ですが、日本の最新技術を世界に発信する絶好の機会でもあります。メダルをとるための技術もあるし、障害者の生活向上につながる技術もある。この拠点の研究から、世界の新しいモデルをつくってほしいと思います。

馳●私は、この拠点をきっかけに、東大を卒業してオリンピックで金メダルをとる人が出ることも期待しています。ハーバードにもオックスフォードにも何人もいますからね。生涯を通じてトップレベルの競技にも生活の中のスポーツにも興味を持ち、相乗効果を発揮していただきたいと思っています。

田口●私は25歳で病気にかかり、それまでは普通に歩いていたのに何もできなくなって、生きる意味がないと思いましたが、いくつかの出会いを経て射撃を始めました。おかげで、次の大会で何点とるとか、メダルをとるとか、目

標を持つことができました。スポーツがもたらした大きな効果でした。競技を見て感動したと言ってもらえることがあります。これは感動を味わうだけでなく障害とは何かを考える好機だと思います。考えたことを個々が自分内に落とし込めば、社会がアクセシビリティを意識する方向に進むと思います。拠点の研究の結果として、多くの障害者がスポーツに関わることを期待しています。

五神●スポーツ科学研究を媒介に、先ほど遠藤大臣がおっしゃった「知・徳・体」を高い次元で融合させることが進む、と私は確信しています。多様な人々が互いに認めあいがらいきいきと活躍する社会において、知が経済を駆動していく仕組みをつくりたい。そこで貢献しないと東大らしい成果とは言えないと思います。このことを構成員にメッセージとして発しつつ、学外の皆さんには拠点の今後に期待していただきたいと思っています。

小林●スポーツ研究の力で社会に貢献するという力強いメッセージ、しかと受け取りました。



◎記念式典では日本スポーツ振興センター(JSC)の大東和美理事長から来賓挨拶をいただきました。



◎シンポジウムの第1部では「スポーツ・健康科学の基礎と応用」と題して身体運動科学研究室の4先生による講演が、第2部では、「スポーツ科学とオリンピック・パラリンピック」をテーマに、国立スポーツ科学センター長の川原貴さん、柔道日本代表チーム監督の井上康生さん、シドニーパラリンピック男子車椅子バスケットボール日本代表キャプテンの根木慎志さん、総合文化研究科の福井尚志教授によるパネルディスカッションが行われました。

◎馳大臣は、若い頃に石井先生の本を読んでウェイトトレーニングに励んでいたという逸話も披露してくれました。

◎終盤には、3人の硬式野球部員(山本・喜入・宮台選手)が登場。馳大臣や、部の大先輩である小林教授から激励されるひと幕も!



世界に広げよう、「グレーター東大コミュニティ」の輪!

Be a UTokyo ambassador

東京大学校友会海外同窓会一覧

1996年のNY銀杏会の設立当時から同窓会活動に関与しております。現在は同会のアクティビティコミッティーとして学部学生の体験活動プログラムの指揮を執っている他、昨年設立された東大ニューヨークオフィスの理事長として東大のグローバル化に微力ながら貢献しております。

今年の総会は、女性の出席者数が男性を上回り、しかも女性は一人を除いて全員理系、全体でも理系出身者が文系出身者よりも多い会となりました。また初めて現役の留学生も参加し、時代の流れを感じる総会でした。今年は残念ながらご欠席でしたが、毎年小和田恒国際司法裁判所判事にもご出席いただいております。

毎月パブで懇親会を開催し、年に5~6回はゴルフ会をやっています(京都大学、一橋大学との対抗戦含む)。

桑港赤門会
2007年設立 57人

サンディエゴ赤門会
2014年設立 40人

南加東大
1967年設立 83人

スタンフォード・シリコンバレー赤門会
2007年設立 200人



長谷川泰さん
1986年理学系研究科卒

2ヶ月に一度、20~30名で、会長宅隣にあるゲストハウスを利用して懇親会を開催しています。東大から出張に来られた教授を交えた講演会、食事会、音楽会なども行っています。

シカゴ赤門会
2011年設立 35人

さつき会アメリカ
2009年設立 110人

ミシガン赤門会
2011年設立 60人

ジョージア赤門校友会
2007年設立 10人

東大ヒューストン校友会
2011年設立 5人

メキシコ赤門会
2014年設立 37人

7月上旬に約20名が集まって懇親会を開催しました。

ペルー赤門会
2014年設立 18人

5月4日に地震工学をテーマに講演会を開催しました。

増山 正晴さん
1968年工学部卒
1996年設立 400人



NY銀杏会

小柳尚子さん
1993年医学部卒



オランダ淡青会

英国赤門会
2009年設立 353人

ウィーン銀杏会
2013年設立 51人

スイス東大同窓会
2012年設立 43人

フランクフルト赤門会
2011年設立 5人

欧州フランス赤門会
2011年設立 200人

デュッセルドルフ赤門会
2010年設立 33人

スペイン赤門会
2012年設立 12人

イタリア赤門会
2013年設立 5人

会員は日本人留学生が多いため、卒業による帰国の送別会を兼ねて懇親を深めることが活動の中心です。

羽田正先生を囲む会で議論が白熱

7月2日(土)、欧州フランス赤門会では、日仏高等教育シンポジウム出席のためにパリを訪れた羽田正先生(理事・副学長)を招いて懇親会を開催しました。羽田先生も含めて、女性5人男性6人が集まり、夜7時半あたりからシャンパンを片手に生ハムをつまみ、店主ソムリエの方からの料理の説明を皮切りに話が盛り上がりしました。様々なバックグラウンドの方々がそろい、BREXIT、ジェンダー、大学教育、報道・メディア、日仏米のエリート、イスラム、羽田先生が取り組まれているグローバルヒストリー、などなど、広い範囲の話題について議論が盛り上がりしました。東大については、予算確保の難しさ、女子生徒の比率がなかなか伸びない問題、同窓生同士のつながりなど、早慶やアメリカのトップの大学と比べての議論が白熱しました。



ブラジル赤門会
2013年設立 40人

東大チリ会

2013年設立 30人

←「東大校友会ニュース」No.30号より。「東京大学ビジョン2020」にうたわれた卒業生活動の役割が、「貢献」「組織」「協働」「学び」「財源」「情報」という6つのキーワードを軸にして明確に示されています。

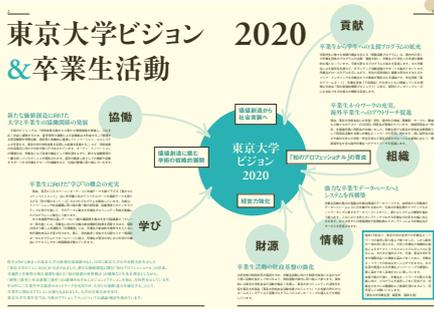
訪英した藤原帰一先生と懇談

4月25日(月)、第11回となるIARU学長会議がオックスフォード大学で行われた際、出席のために訪英した藤原帰一先生(法学政治学研究所)をお迎えして、英国赤門会をはじめとする卒業生が、レセプションで懇談しました。



東京大学カンボジア同窓会設立 神馬征峰先生によるミニフォーラム開催

8月6日(土)、プノンペンのカンボジア日本人材開発センター(CJCC)会議室において東京大学カンボジア同窓会が設立されました。津川貴久カンボジア日本公使ほか約35名の日本人、カンボジア人同窓生らが参加する中、神馬征峰先生(医学系研究所)をキーノートスピーカーとするミニフォーラム「Sustainability Challenges in Cambodia」は大きな盛り上がりを見せました。



担当者より

本年5月に海外同窓会を対象に実施したアンケートの回答中もっともリクエストが多かったのが、「教員の海外同窓会訪問」でした。しばらく同窓会イベントを開催していない同窓会も、先生方のご訪問を機に、交流を新たにすることができます。ぜひ、先生方のお力で海外同窓会に「新たな流れ」を巻き起こしていただければ、と思っております。



卒業生室 福岡和子

問い合わせ：卒業生室 tft.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



東京大学のパワーをより大きく力強いものとして人類社会全体に貢献していくためには、学内にいる構成員に加えて、学外にいる卒業生の皆さんの力を結集することが必要です。「東京大学ビジョン2020」にも掲げられたこの信念の下で日々活動している卒業生室が、全学の教職員に向けて呼びかけているのが、海外出張時の現地同窓会との交流です。いわばそれは、教職員に「東京大学の大使」になってもらうということ。世界に広がる「グレーター東大コミュニティ」の現状と、卒業生室長のメッセージをお届けします。



古谷 研
理事・副学長
卒業生室長

東京大学のアンバサダーになってみませんか

「東京大学ビジョン2020」では、現役の方と卒業生による協働で大学全体の力を大きくしようというメッセージが打ち出されました。卒業生とともに社会に貢献することが今後ますます重要になります。そのためには、大学の現状やこれからの方向性を共有することが必要です。現役と顔を合わせることで、大学の後輩を応援しようという気運も確実に高まるでしょう。そこをお願いしたいのは、海外出張の際に、現地の同窓生会に声をかけることです。本来の仕事を終えた後、たとえば夕方以降には、「東京大学のアンバサダー」になっていただきたいのです。

海外同窓会には、仕事で現地にいる日本人の会と、東大に留学し卒業後に母国に戻った外国人の会と、大別して2種類あります。私は、この立場についてから両方を見る機会を得ました。

ニューヨークの会は前者で、現地で働く30~40代の日本人卒業生が主でした。生研のオフィスがあるビルの小会議室で講演会を実施してもらい、約30人の卒業生と親密な交流ができました。人間活動の規模拡大で海の生態系の物質循環が滞り始めているという、私の研究の話をしたところ、様々な意見や感想をもらいました。異分野の人から研究につながる新しいアイデアも聞けて、刺激を受けました。

この3月に訪れた台湾の同窓会は後者でした。同窓会総会と併催の交流会は、100人以上が参加した盛大な会でした。ビジョン2020の話をしたところ、強い関心を集め、大学への大きな期待を感じました。台湾の方ばかりなのに話す言葉がみな日本語だったのが印象的です。日本で教育を受けたことを大事にしてくれているように感じました。東大のウェブサイトにも中国語ページができてうれしい、という声も聞きました。

卒業生からよく聞かれるのは、総長が交替したこと、法人化の話、キャンパスの様子、恩師の近況、あと、大学ランキングも話題になります。

これまで、海外出張先での同窓生との交流は、仕事仲間中心でしたが、現地の同窓会参加により、人とのつながりが飛躍的に広がることを実感しました。卒業生と話すこと自体が楽しいですし、現地にいないとわからない情報を聞けるのもうれしいものです(談)。

毎月1回懇親会を開くとともに、年に1回程度、東京大学や京都大学から出張で来る先生の講演会を行っています。先生や学生がモンゴルに来られる際にはぜひお知らせください。

東大モンゴル同窓会

2015年設立 40人

校友懇親会とミニ講演による定例交流会を毎月開催しています(2月と8月を除く)。その他、「体験活動プログラム」の訪中回との懇親なども行っています。また、年に複数回、他大とのゴルフ対抗戦(北京如水会とのゴルフコンペ/毎回約15名)、ホームカミングデイにあわせた北京校友会東京会の開催(約30名)、中国人向け情報発信プラットフォーム(「微信」/約300名)の運営も行っています。



佐野史明さん
2008年農学部卒

東大北京校友会

2004年設立 773人

UTokyo Club in Nepal

2016年設立 00人

UAE赤門会

2015年設立 24人

ミャンマー赤門会

2013年設立 55人

隔月で懇親ゴルフ会、四半期ごとに懇親食事を開催しています。

上海日中銀杏会

2000年設立 150人

香港淡青会

2013年設立 85人

ベトナム赤門会

2010年設立 105人

台湾校友会

2004年設立 470人

バングラデシュ赤門会

2008年設立 数人

東京大学カンボジア同窓会

2016年設立 37人

インド赤門会

2012年設立 88人

東京大学同窓会(タイランド)

1999年設立 40人

泰国淡青会

2003年設立 40人

フィリピン赤門会

2015年設立 30人

東京大学インドネシア同窓会

2014年設立 200人

淡星会(シンガポール)

1987年設立 207人

2000年以降の卒業生の会で懇親会やゴルフコンペを開催しています。女性会員の会では不定期で女子会を行っています。

赤門真珠会

2011年設立 数人



吉原素子さん
1995年医学部卒

カジュアルな懇親会を不定期で開催しています。年4回開催されるシドニー最大のゴルフイベント(出身大学対抗戦)に参加したり、親睦を目的としたゴルフ練習会も行っています。また、大学生のシドニー留学時の懇親会、海外の東大OB、OGと現役学生との交流の機会を持つようにしています。今年1月に教養学部の1年生がシドニー大学への留学でいらした際、懇親会を開催させていただきました。また、ぜひご連絡いただけたらと思います。東京大学の学生さんが個人でシドニーに留学でいらっしゃる際にも、ぜひご連絡をいただけたらうれしいです。

Budi Indraさん
1993年農学生命科学研究科卒



10月に園田茂人先生(東洋文化研究所)が出張でいらっしゃる際、久々に同窓会イベントを開催する予定です。

Please kindly inform us of the schedules of professor(s), executive staffs, or executives of UTokyo visiting Thailand beforehand so that we can organize a meeting with our alumni members.

ネパール同窓会準備委員会に西沢利郎先生が出席



7月18日(月)、カトマンズにおいて同窓会キックオフミーティングが開催されました。参加者24名中、小川正史在ネパール日本大使、西沢利郎先生(公共政策大学院)以外の22名は全員ネパール人帰国留学生でした。日本人駐在員の少ないネパールでは、同窓会活動も帰国留学生が中心となります。

ひょうたん島通信

大槌発! 第33回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



空飛ぶ風見ドリ

佐藤克文

大気海洋研究所
海洋生命科学部門行動生態計測分野 教授

水面を薙ぎはらうように滑空するため、水薙ぎ鳥と名付けられた海鳥がいる。大槌町周辺にある無人島にも、数万羽が営巣している。私たちは2004年からその生態を調べてきた。バードウォッチャーの間では離陸するために樹に登る奇妙な鳥として有名なオオミズナギドリが、実はちゃんと地面から離陸できることが鳥に上陸して観察してみるとすぐにわかった。2011年の津波によって、壊滅的な影響を被ったと思いきや、島の営巣地は波が届かない高台に設けられていた。小型のGPSを鳥に付けるバイオロギングという手法によって、普段は島の周辺で餌を漁りつつも、時に北海道東岸まで遠征することなどがわかってきた。GPSデータからは、蛇行しながら滑空する様子が見て取れた。さらに軌跡を詳しく調べてみると、ある方向に飛んでいる時に速く、その反対方向では遅くなるといった傾向が見えてきた。

「鳥の飛び方から、現場の風向・風速を推定できるかもしれません」。調査のために毎年無人島にこもって頑張る大学院生たちからそのアイデアを初めて聞か

されたときは半信半疑であった私も、人工衛星経由で推定された風情報と良く合う推定値を見せられたら認めざるを得なくなった。

「これは、凄いいことになりそうだ」。風向風速計を設置できる陸上とは異なり、海上における観測点は極端に少ない。現在、人工衛星に搭載したマイクロ波散乱計を使って海面の凹凸を測定し、経験式に基づいて海上風を推定することが広く行われている。しかし、日本上空を人工衛星が通過するのは日に1~2回と少なく、また陸地からの反射波が邪魔する沿岸海域ではデータが欠けている。鳥経由で見積もった風は、三陸沿岸から北海道東部までの広い海域において、5分間隔でおおよそ5kmの分解能で得られている。鳥が取ってくるデータを同化することで、大型計算機によるモデル計算の精度が上がると、より精度の高い予報に繋がるはずだ。「そんなバカな」と言う向きもある。

超小型フライトレコーダーを背に離陸するオオミズナギドリ (写真撮影: 後藤佑介)。



しかし、先行研究では海面で休息する鳥の漂流速度から海面流を推測し、それを入力したモデル計算結果がより実態に合うよう修正されたという結果も得られている。

津波から5年以上が経過しても復興が進まず、深刻な状況からなかなか抜け出せない大槌町というイメージを抱いている人が多いかもしれない。私たちはそんな大槌町から、世界の人々をあっという間に知らせる情報発信をしていきたい。

関連論文 Yoshinari Yonehara, Yusuke Goto, Ken Yoda, Yutaka Watanuki, Lindsay C. Young, Henri Weimerskirch, Charles-André Bost, Katsufumi Sato. Flight paths of seabirds soaring over the ocean surface enable measurement of fine-scale wind speed and direction. *Proceedings of the National Academy of Science* (2016).

調査船 弥生のつばやき 震災後2回目となる一般公開



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

去る7月16日(土)、震災後2回目となる国際沿岸海洋研究センターの一般公開が行われました。来場者数は345人と、昨年度の200人の2倍弱となる盛況ぶりでした。これは、昨年度と同様に、大槌町役場にご協力いただき、町の広報誌にチラシを入れていただいたことに加え、防災行政無線での放送を菊地専門職員が町役場に依頼してくれたことによるものと思われま。アンケートによると、「放送を聞いて」イベントを知ったという方

が結構いらっしゃいました。

一般公開のイベントとしては、昨年度と同様の「生き物タッチプール」、「ウミガメにさわってみよう」、「大槌いきもの博物館」、「海を調べる道具の紹介」、「講演会」、また、新たな試みとして、「海藻 de Art」、「海中ロボットで海の中をのぞいてみよう」、「おおつちかるた」、「おおつちさかなの美術館」が行われました。

来年、上陸できれば、自分も参加してみたいと思います(無理か……)。



一般公開の前日15日(金)には、大槌学園の70人を迎えて特別公開が行われました。ウミガメは大人気です。

制作: 大気海洋研究所広報室 (内線: 66430)

ワタシのオシゴト 第125回

RELAY COLUMN

アイソトープ総合センター事務室 吉泉浩二

初めましてアイソトープ総合センターです!



事務室にて。

学内広報「ワタシのオシゴト」連載スタートから第124回までアイソトープ総合センターからの執筆が一度もなく、今回初ということでセンターの紹介も兼ねまして、みなさんに知っていただく良い機会となればと思いました。

最初にアイソトープ総合センターの所在地ですが、浅野地区にあります。住所が文京区弥生なのになぜ浅野地区と言われるのか? 元をたどると、あの忠臣蔵で有名な赤穂藩浅野家(分家)とも関係のある浅野氏の浅野侯爵家がこの地にあったことが浅野地区と言われる由縁と聞いています。

ワタシのオシゴトは事務室に関わる業務全般とセンターの行事や運営面に関わる業務、主に予算や組織の人事面を中心に行っています。センターは他部局に比べれば小さい組織に入りますが、仕事を進めていく上では先生方との距離感が非常に近いため、やりやすく環境の整った職場であることは間違いありません。



アイソトープ総合センター全館。

得意ワザ: 外食

自分の性格: 凝り性

次回執筆者のご指名: 内山 淳さん

次回執筆者との関係: 東大基金時代の仲間

次回執筆者の紹介: 一言で言うと「誠実」そのもの

留学生さん
いらっしやい!

第31回



海を越えて東大に来た学生に聞きました。



🇵🇰 パキスタン

ムスタファ・アッタ E さん

Atta E Mustafa

工学系研究科社会基盤専攻
修士1年

ラホール出身。物静かな印象ですが、空手やバドミントンが好きな活動派。パキスタン留学生会の会長もしています。友人と日本を旅するのも楽しみだとか。

Q. 東大・日本に来たのはどうして?



母国で社会基盤開発に関わっていたのですが、この分野で日本がとても実践的な教育をしているのに惹かれました。パキスタンと日本は地震が多いなど共通点も多いんです。恩師や先輩に東大出身者が多く、東大はやりたい研究ができる場所だと確信しました。アジア開発銀行の奨学金がもらえて日本に来ました。

Q. いま何を研究しているの?



橋梁研究室で新幹線の高架橋の振動制御を研究しています。アクティブ・マスダンパーを使用して高架橋の振動を抑え、新幹線が減速しなくても済むようにするための研究です。必修科目はすべて取得したので、これからは研究に専念できると思います。将来は日本で博士号を取って日本の会社で働きたいです。



Q. 東大・日本で困ったことは?



最初は電車の乗り換えが複雑で戸惑いました。日本語が全然できないまま来日したので言葉の問題も大きかったです。「こんにちは」もわからなくて(笑)。今は社会基盤専攻の日本語教室に通っていて、だいぶ上達しています。

Q. 東大・日本で好きなところは?



東大の社会基盤専攻は世界ランキングが高いところ、日本、特に地方は自然豊かなところ。今度、友人と北海道へ旅行する予定です。



Q. パキスタンのいいところを教えてください!



パキスタンはとても美しいところです。特に、デオサイ高原は「世界の屋根」とわかれていて、標高4000mの素晴らしい風景が堪能できます。写真は高原を訪れた時に撮影したものです。



協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

あちこちそちこち 東京大学 第11回

本郷・駒場・柏以外の本学の現場の教職員が紹介

農学生命科学研究科
附属演習林
樹芸研究所の巻

所長

● 鴨田重裕

小さい演習林の大きな野望

パンフレットの
的な説明は割愛
して、当所の野
望に絞って紹介
します。それは
持続可能な社会
を目指すならば
避けては通れない、
日本林業の立て
直しです。それ
には早生樹の活
用が不可欠です。
当所では早生樹



30年生のユーカリ成木。

の雄、ユーカリの活用を提唱しています。しかしユーカリは、1954年から4年間国費をつぎ込み37都府県にわたり拙速に大々的な造林試験を展開して失敗した過去があり、よく反省されることなくダメの烙印を押された感があります。ところが当所は1982年にユーカリ属73種の導入実験を開始しました。先人の失敗に何を学び、どういった勝算を目論んだのか、その肝心なところは今では不明ですが、およそ30年生のユーカリの成木たちが確かなヒントを示しています。次にやるべきはユーカリを「林」で育て、「林」の生産性を評価することです。ユーカリがしっかり成林するのか？という疑問には、和歌山県日高郡に遺る1957年植栽の *Eucalyptus globulus* の林が答えてくれます。私たちが目指すのは東大で実績があるユーカリ種でもっとすごい林を作って見せること、それと並行して成木を有する強みを活かして材の加工実験を進め、利用の可能性を示すことです。生育と利用をセットで提案することがユーカリ提案の要となります。多くの大学演習林がフィールド科学を標榜する潮流にあって、日本林業再生への取り組みは価値ある逆行となると確信します。実現には農学分野に限らない総合的な取り組みが必要です。再生可能な森林資源を活かきける社会の実現はグローバルな課題であり、早期に取り組むべきです。



1. 当所産ユーカリの集成材と合板。2. 1で作った机と椅子。3. ユーカリ (*E. elata*) の組織培養による増殖実験。4. 植栽2年2カ月のユーカリ (*E. smithii*) を見学する全学体験ゼミ受講生。

www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学協創推進本部

第129回

大学発ベンチャー起業 —起業・ベンチャー支援

政府は産業界の新成長戦略に医療・IoT・AI・ロボット・環境エネルギー・次世代型農業などの先端研究開発テーマを掲げ、イノベーション創出を担う大学におけるベンチャーの活性化に関する様々な施策をあげています。ベンチャーへの投資活動の促進をはじめ、政府による後押しは今後、起業を目指す学生や教員にとって好機となっています。産学協創推進本部は、インキュベーション活動の他、特に起業家教育に力を入れています。今年で12期目となる「東京大学アントレプレナー道場」には、過去2,000名以上の学生が受講し、既に100名近くの卒業生がその後起業するに至っています。全国で大学発ベンチャーの設立数が横ばいとなる中、東京大学は他大学に圧倒的な数で全国1位を誇っています。また研究開発成果をベースにした事業化支援では、今年3年目となる「EDGEプログラム(文科省)」において、大学発イノベーションと新規事業創出を促進しています。当本部では、支援先(インキュベーション先)企業からの相談案件以外に起業・経営に関する相談を年間80~100件程度の受け付けており、その相談者の4割が在学生、3割が教員・研究職員・卒業生、2割が大学関連ベンチャー、残り1割が学外(企業他)です。受付案件ごとに、経営に関するアドバイスの他、各種支援機関の紹介、インキュベーション施設の利用相談、ビジネスコンテスト等への派遣、学内広報・外部メディアへの紹介、営業・マーケティング支援など多角的なサポートを行っています。お問い合わせ内容によっては、東大TLOもしくは東大エッジキャピタル(UTEC)から直接回答をお願いする場合があります。また、文科省・経産省が所管する研究開発型の事業化支援プログラムに参画するシードアクセラレータ、大学と連携する民間VC、エンジェル投資家、外部メンター、弁護士・公認会計士といった外部プロフェッショナルとの幅広い連携も図っており、今後も皆様のご期待にそえるよう、起業・ベンチャー支援を強化した取り組みに邁進してまいりたいと思います。



第12期東京大学アントレプレナー道場授業風景

産学協創推進本部 www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

インタープリターズ・第109回 バイブル

総合文化研究科 准教授 岡本拓司
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

科学と革命

均一的な自然観や科学観が行きわたっている社会では意識されないかもしれないが、科学コミュニケーションの実践の場では、一般的には相手の科学観・自然観に敏感である必要がある。そして、さらに意識の及ばないことではあろうが、語りかける相手が革命を志している場合には特に注意が必要であるかもしれない。

革命は現政権の正当性を否定し、時に大量の流血に至る事態をもいとわずこれを打倒する。目前の王権が神や聖書に自らの正当性の根拠を見出しているのであれば、これをまず否定する必要がある、ときにその武器として科学が役立つことがあった。19世紀半ばのエンゲルスは、共産主義社会の到来は科学が保証しているとし、化学に基づけば有機物さえ合成させることから唯物論を擁護し、進化論を例にひいて弁証法を支持した。具体的には、こうして同じ陣営内の強敵であったキリスト教社会主義者たちに対抗したのであったが、キリスト教に代わる世界観・歴史観の根拠は科学に求められた。

20世紀初頭に相対論・量子論が現れると、古典物理学が保証していた物質観・宇宙観は破綻したとする論調が顕著になった。エンゲルスの衣鉢を継ぐレーニンも、ここに主観主義や観念論、神や自由意志が入り込むことを恐れ、科学は人間の主観から離れた厳然たる客観的実在を漸近的に明らかにしていくものとする主張を基本線として論陣を張った。彼の一派はロシアで革命に成功し、その事実が彼らの主張の正しさを証明していると理解されたため、いまでもこうした科学観・自然観の信奉者は各地に、むろん日本にも、存在する。

一方で、あらゆる革命において科学観が重要な役割を果たすわけではない。明治維新が革命であるとする、ここでの主要な問題は、天皇による統治の正当性と、「祖法」たる鎖国であり、自然に関する見解が政治運動に結び付くことはなかった。神話的権威に基づく国家において、文明開化の呼称の下、むしろ科学の導入が飛躍的に進んだのは一見奇妙であるが、背景には、この国の誕生が、自然や科学に及ぶ思想的格闘を伴わなかったという事実がある。

科学と自然を素通りする革命を経験した日本では、科学も自然も政治的・思想的には無色であると前提とされることが多いようにも感じられる。しかし、現在でも、科学技術インタープリターが直面する聴衆の中には、花鳥風月の移ろいに自然弁証法を見出す革命家が紛れ込んでいないとも限らない。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! The University of Tokyo Archives 文書館 ぶんしょかん



第3回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

昭和6年、航空研究所行幸!

昭和6年5月11日、新たに駒場に建築成った航空研究所 (JAXA前身のひとつ) へ、昭和天皇の行幸がありました。航空研究所は附置研究所のひとつで、もともと越中島にあったのですが、関東大震災で被災したため、現在の駒場IIキャンパスに新たに復興建設が進んでいました。その竣工の目処がたち、また当時の斯波忠三郎所長が天皇に進講したことがきっかけとなり、新しい航空研究所の視察が実現しました。

さて、この行幸に関する文書は、現在文書館にいくつかあります。

まず、航空研究所の文書「行幸関係書類」(S0010/23) です。2月9日から、毎週のよう主任会議を開いてどのような企画とするかが議論され、行幸後の研究所一般公開の準備、行幸時の展示用に海軍や企業から機械を借用する手配など、行幸という行事のコンテツ準備の様子がとてもよくわかります。



また、本部庶務課の文書 (S0010/24) では、文部省を通じて行幸を願い出る手続きや当日のドレスコードなど、行幸という行事の運営に関する準備の様子がわかります。

そのほか、個人から寄贈されたアルバム「航空研究所 昭和6年5月11日」(F0025/史A36) もあります。当時の建物や種々実験機械、所員集合写真が見られます。

さらにもうひとつ、消失の危機を危うく逃れて文書館にたどり着いた資料があります。「昭和6年航空研究所行幸記念映画」(F0037) という35ミリフィルムです。これは1960年頃に、学内のゴミ箱から拾われたもの(!)です。ここには、天皇が到着する前の研究所のそわそわした感じから、行幸の過程、最後には下賜された金一封まで、10分ほどの映像が記録されています。



このように、「文書」といっても実は紙の簿冊だけではなく、簿冊、写真、映像とさまざまな媒体があり、それらを見るとこの行幸という行事が立体感をもって身近に感じられます。みなさんもぜひ御覧ください。(文書館准教授・森本祥子)

東京大学文書館
www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
7月12日	低温センター	平成28年度低温センター安全講習会(第1,2,3回)開催	4月27日
7月12日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.8】硬式テニスで男子が七大戦三連覇・女子が2位と好成績!	6月30日
7月13日	本部環境安全課	平成28年度「東京大学安全の日」講演会開催	7月5日
7月15日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.9】ヨット部は七大戦で惜しくも4位に	7月9日
7月19日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.10】柔道部は七大戦で6位に終わる	7月9日
7月20日	カブリ数物連携宇宙研究機構	一般講演会「ランドール博士の科学的探索-ダークマターと恐竜の深い関係?」開催	6月19日
7月25日	政策ビジョン研究センター	国際ワークショップ"The Shifting Dynamics of the U.S.-Japan Alliance"開催報告	6月15日
7月27日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.11】剣道部は七大戦で女子が6位、男子は惜しくも敗れ準優勝!	7月16日
7月27日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.13】ラクロス部女子が七大戦で2位と健闘!	7月16日
7月28日	工学系研究科・工学部	ご父母のためのオープンキャンパスを開催	7月16日
7月28日	国際本部	ソウル国立大学と戦略的パートナーシップ覚書締結	7月22日
8月2日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.12】空手部が七大戦で男女ともに4位の成績を収める	7月17日
8月2日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.14】水泳部競泳陣が七大戦で男子が優勝!女子は4位に	7月23日
8月4日	工学系研究科・工学部	Saudi Aramcoからの寄附受入に伴うMOAの調印式	7月26日
8月5日	政策ビジョン研究センター	「健康経営を起点に働き方改革を進める」シンポジウム開催報告	7月11日
8月9日	本部社会連携推進課	高校生のための東京大学オープンキャンパス2016開催	8月3日
8月9日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.15】陸上運動部が七大戦で女子は6位、男子は見事優勝を決める!	7月30日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
7月12日	本部社会連携推進課	東京大学が優れた現代日本建築を世界に伝えるMOOCを7月31日より開講	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0801_00002.html
7月12日	本部学務課	風水害等の災害により被災した入学志願者の検定料の免除について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0601_00005.html



CLOSE UP

「東京大学安全の日」講演会を開催

(本部環境安全課)



第一部の奥村氏による講演に聴き入る聴衆。

7月5日、医学部教育研究棟の鉄門記念講堂において、「セーフティとセキュリティ」をテーマに、平成28年度「東京大学安全の日」講演会を開催しました。農学生命科学研究科のリサーチフェローが八丈島で潜水作業中に亡くなる事故が発生してから11年。本学では事故の発生した7月4日を安全の日と定め、事故災害の発生防止、安全意識の向上、安全文化の定着のため、この時期に講演会を開催しています。

五神真総長による挨拶では、研究者のセーフティのみならず、社会の信頼に応えるためのセキュリティの確保にも配慮が必要である旨が強

調されました。講演会の第一部では、警視庁警務部理事官である奥村徹氏より「危機対応と未然防止対策」と題して、大学において求められる安全管理体制や対策についてお話いただきました。第二部では、「化学物質の発火・爆発危険」をテーマに、産業技術総合研究所 上級主任研究員の松永猛裕氏より、突然の爆発事故を防ぐ取り組み等についてお話いただきました。また、本学環境安全本部の大久保靖司教授からは大学の安全衛生体制や事故の現状についてのお話がありました。本年は、例年より多く、学内外から約280名の参加をいただきました。



CLOSE UP

ダークマターと恐竜の関係を考える講演会を開催 (カブリ数物連携宇宙研究機構)



左から、向山教授、ランドール博士、村山機構長。

6月19日、駒場の21 KOMCEEレクチャーホールにおいて、カブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)と新学術領域研究「なぞ宇宙は加速するのか? - 徹底的究明と将来への挑戦 -」の共催による「ランドール博士の科学的探索-ダークマターと恐竜の深い関係?」が開催され、約200名の参加者で会場は満員となりました。

まず、Kavli IPMU 客員上級科学研究員を兼ねる向山信治京都大学基礎物理学研究所教授が「4次元を超えるかもしれない宇宙」と題して講演を行い、超弦理論では4次元以上の次元が導き出されること、しかしそうした次元が我々から見えない理由などについて紹介しました。

続いて村山齊Kavli IPMU 機構長によるわかりやすい逐次通訳で、リサ・ランドールハーバード大学物理学教授が「ダークマターがつなぐ宇宙・地球・生命-ダークマターと恐竜絶滅」と題して講演し、新種のダークマターによって恐竜絶滅が引き起こされたのかもしれないとの仮説を紹介しました。博士は「抽象的な素粒子理論が私たちに深く関係していることを示したかった」と研究の動機を述べ、説を立ててその真偽の検証をすることで謎を切り崩すことの重要性、歴史の文脈の中で現在を考えることの意義を強調、一見離れた2つの事象をつなげる探求についてのロマンあふれる講演を終えました。



CLOSE UP

ソウル国立大学と戦略的パートナーシップの覚書を締結 (国際本部)



戦略的パートナーシップ覚書調印後の五神総長とソン学長。

7月22日、ソウル国立大学のNak-in SUNG学長一行が本学を来校した際に、戦略的パートナーシップ覚書を調印しました。戦略的パートナーシップ協定・覚書の締結はこれで6校目です。

本学は、ソウル国立大学と1990年に全学的な学術交流協定、2014年に全学的な学生交流に関する覚書を締結し、研究・教育の交流を活発に実施してきました。さらに、2014年には一層の学術交流および人的交流の活性化を目的として、オフィスを相互設置しました。

文部科学省のスーパーグローバル大学創成支

援事業に採択されたことを機に、本学は「戦略的パートナーシップ構築プロジェクト」を開始、ソウル国立大学との継続的・発展的な交流が見込める10部局のプロジェクトチームの支援を行っています。参加部局数は本プロジェクトの中最多を誇り、多様な共同研究をベースに活発な学生交流を展開中です。この数年間、双方の執行部及び担当教員レベルでの議論と検討を進めた結果、この覚書締結が実現しました。部局の枠を超えた全学レベルでのつながりを強化し、より多様な教育・研究交流を推進します。



CLOSE UP

アラムコ・アジア・ジャパンの寄附受入のMOA調印式 (工学系研究科)



調印後に笑顔で握手するアラムコ・アジア・ジャパン株式会社アハメドアルクネイニ代表取締役社長と保立和夫理事・副学長。

サウジアラムコの日本法人であるアラムコ・アジア・ジャパン株式会社から、「太陽光を機軸とした持続可能グローバルエネルギーシステム総括寄附講座」への寄附に伴い、同社のアハメドアルクネイニ代表取締役社長ら4名が、7月26日、本学に来校し、アルクネイニ社長と保立和夫理事・副学長がMOA(合意覚書)に調印しました。

世界最大の石油輸出国であるサウジアラビアにおいては、近年の急激な人口増加と経済成長

により、石油の国内消費が増加の一途をたどっており、石油の輸出余力の減少が心配されています。このため特に、発電部門の石油消費を太陽エネルギーで代替し、その石油を輸出に回すことにより、石油の内外価格差によって生じている莫大な機会損失を回避するとともに、太陽エネルギー関連産業の育成によって国内の産業構造の脱石油化を推進することが期待されています。



CLOSE UP

競泳と陸上で優勝し、七大戦は勝負の9月へ! (本部学生支援課)



本学主管で行われている第55回七大学総合体育大会(七大戦)。この7月にはヨット、柔道、ラクロス女子、剣道、空手道、競泳、陸上競技の7種目が行われました。このうち、23日~24日に相模原市の銀河アリーナにて行われた競泳競技で男子が優勝し、30日~31日に品川区の大井ふ頭中央海浜公園にて行われた陸上競技でも男子が優勝。

また、16日~17日に駒場第二体育館ほかで行われた剣道の男子、16~18日に駒場ラグビー場で行われたラクロスの女子も準優勝と健闘を見せました。こうした結果、東大は総合122.5Ptで堂々1位を堅持(8月1日現在/42種目中19種目終了)。総合優勝に向けて確実に歩を進めていますが、2位に115Ptの阪大、3位に96Ptの京大が迫っており、油断禁物の状況です。淡青色のアスリートたちに向けて、我々教職員からも、より一層の声援をおくりましょう!

※訂正とお詫び / 1483号P4の育徳堂の記述で「1935年に竣工し、当時の矢内原忠雄総長が命名」とあるのは「1935年に竣工し、後に矢内原忠雄総長が命名」の間違いでした(竣工時の総長は長與又郎先生。お詫びして訂正いたします。



「東大 学長」と「大学院 教授」

マスメディアによる大学報道についての意見をここに書くのは、筋違いなのかもしれません。しかし新聞や雑誌に書くのも、せっかくのお座敷に土足で上がるようで、はばかりられます。そこで問題提起のつもりで、関係者に伝わることを期待しながら述べます。

大学に関する報道で、目にするたびに気になる表現が二つあります。その一つは「東京大学学長」。法人化する前は、文部大臣（現、文部科学大臣）が交付する辞令での正式名称は「学長」で、「総長」は学内での通称でしたから、外部のメディアが「学長」と記すのも当然だったでしょう。現在でも国立大学法人法での呼称は「学長」ですので、文部科学大臣からの任命通知にはそう書いてあるかもしれません。

しかし現在、「東京大学基本組織規則」にあるように、「総長」はすでに通称ではなく正式名称です。ふだんは政権を罵倒しまくっている新聞なども、この点に関してだけ文科省に追従して「学長」と記すとは、いったいどうしたことでありましょうか。

もう一つは「東京大学大学院教授」。複数の○○学部と大学院○○研究科が、国立大学法人東京大学に属しているのが、本学の組織形態です。したがって、部局名を記さずに略称するなら、あくまでも「東京大学教授」のはず。「東京大学大学院」という統一組織は存在しませんし、そもそも「大学院教授」とは、たとえば英語で表現できません。

ただもしも、教員自身が嬉々として「大学院教授」と名乗っているとすれば、問題は深刻です。やはり大学のセンセイ方は、自分の研究と研究者養成にしか関心がなく、学部の授業など、片手間にやっているんだ。そういう誤解が世間に広まることを危惧します。育成する人数の多さに関するかぎり、大学が社会に対して最も大きく貢献している事業は、学部学生の教育のほうですから。

荻部 直

(大学院法学政治学研究科・法学部)